URBAN INNOVATION INSTITUTE
UIIまちづくりレター
まち・つくる通信　vol.29
平成 31 年 3 月 25 日　発行

NPO 法人 AKITEN の取り組み～及川代表に聞く～

■八王子市の中心市街地の概要

八王子市は、多摩地域唯一の中核市です。人口は 56 万人余りでまだ増えています。中心市街地の歴史については、甲州街道沿いに集積していた商業施設が鉄道開通後に駅周辺に移り、百貨店やオフィスが立地しました。経済環境の変化により現在は百貨店は撤退しています。人差し指を指したような形になっているのが市で定義している中心市街地の図です。今後は JR 八王子駅と京王八王子駅の間にコンベンション施設を整備したり、JR 八王子駅と京王片倉駅の間にあった医療刑務所の跡地を再開発したりする予定です。しかし駅から離れた甲州街道沿いは人通りが少ない状況です。

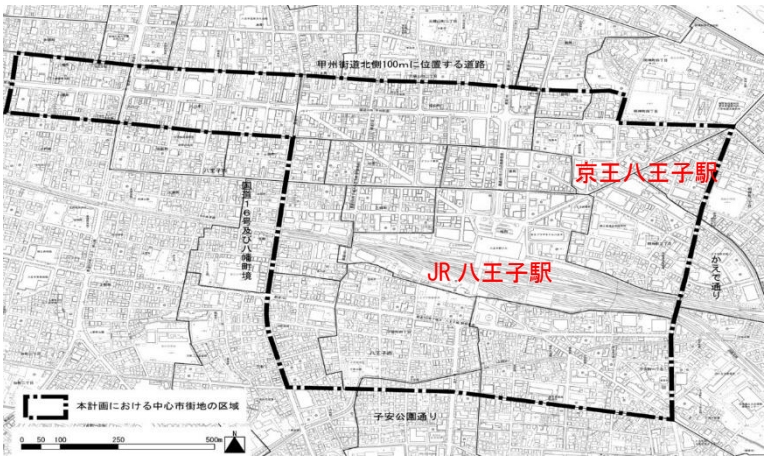

図 1 八王子市の中心市街地の区域

■八王子の中心市街地の課題と AKITEN のアプローチ

中心市街地の課題は空き店舗が多いことです。私たちが活動を始める前の段階の 2009 年では空き店舗の割合が 12.8%、2012 年度では 15%という高い数字になっていてしかも増加傾向にありました。そこで空き店舗が増える理由を考えてみました。例えば商店街にあるお店が閉店してしまうと、そのお店に足を運んでいたお客さんがこの商店街に来なくなります。それで商店街全体の人通りが減ってしまいます。それによってまた 2 店舗目、3 店舗目と閉店が増えていくとここが持っていたお客さんも来なくなって、ますます商店街のお客さんが減っていくという負のスパイラルに陥ります。これをくい止めるために何かできないかと考えた時に、このお店が空いたときにその空き店舗を何か地域で使うことができないかということです。もし地域で使うことができればお客さんが空き店舗に足を運んでくれて、新しい借り手が見つかるまでの間この商店街が持ちこたえることができるのでは

図２ＡＫＩＴＥＮで使用した空き店舗

ないか。そのような発想で、私たちは駅周辺で様々な空き店舗を使いました。

空き店舗を使うときは、オーナーさんにお願いして無料で貸してもらいました。私たちだけではなく市役所やまちづくり会社とも連携しながら進めていった結果、空き店舗の数がかなり減って、2015 年度では 9.9%になりました。そのうち貸し出せる空き店舗が 120 くらいしかなく、これぐらいだともう借りたくても借りれない状況になり、もはやマッチングが難しいぐらいになりました。

図３ＡＫＩＴＥＮのメンバー

■AKITEN のメンバー

私たちは 7 人で活動してきました。ランドスケープのデザイナー、建築家、イラストレーター、写真家、家具や什器が作れるデザイナー、グラフィックデザイナーと私、八王子市議会の議員です。私以外は全員クリエイターといわれる職業に就いていています。私はかつてコンサルタントをやってきたのでプロジェクトマネジメントを担当しています。

■活動の沿革

活動の沿革ですが、2012 年から活動を始めました。最初に八王子がどんなまちになったらいいかを考えるトークイベントを行いました。2014 年に NPO 法人化しまして、アーツカウンシル東京からの事業委託というかたちで 2 年間、八王子周辺のアートプロジェクトを東京都と共催という形で実施しています。その後八王子駅周辺の空き店舗がかなり減ってきたので、今は八王子駅から西八王子駅に事務所を引っ越して、レジデンスとギャラリーを運営しています。メンバーにクリエイターが豊富にいますので、デザイン制作やリノベーションといった収益事業も開始しました。昨年、国土交通省の大臣表彰を受けてから、視察や他の都道府県からの仕事の依頼をいただいたりすることが増えてきました。

■活動の方針

活動の方針についてご説明します。アート・デザインの力で、まちの理想像を提案し、現在のまちの姿と理想像の間にある GAP の解消に向けて、行政とも連携しながら課題解決策を実行していくことを活動の方針にしています。まず自分たちで八王子のまちというのはこうあるべきではないかというのをトークイベントやワークショップを重ねていって理想像を提案します。その理想像が見えたところで初めて GAP が見えてくるので、その GAP をどうやって埋めていったらいいかということを考えて解決策を実行します。私が市議会議員をしているので行政に対して議会の場でこうあるべきだという提案をすることもあります。

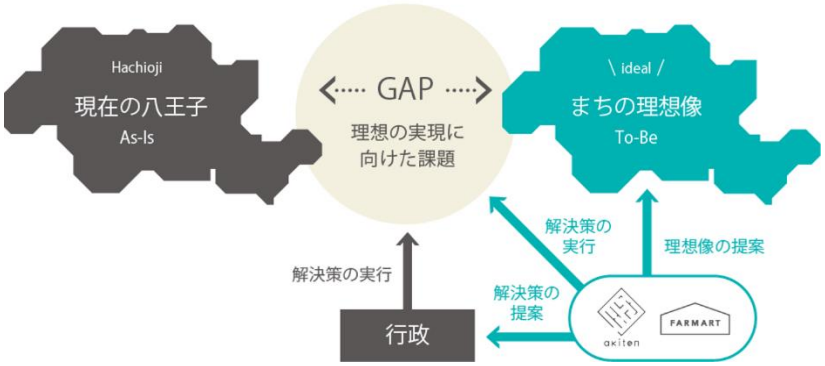

図４ＡＫＩＴＥＮの活動方針

■体制図

NPO 法人なので非収益事業と収益事業ということで区分していますが、非収益事業とはいえ赤字にはならないようにしています。主な事業を 3 つに分けると「まちの理想像の提案」、「仲間集め」と「解決策の実行」ということで、その内容をかいつまんで説明したいと思います。

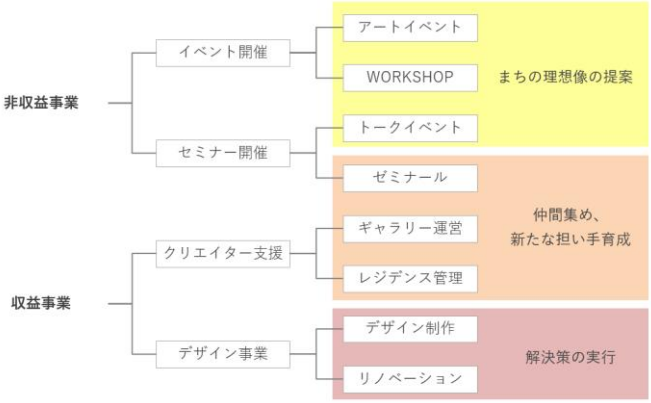

図５ＡＫＩＴＥＮの体制図

・事例 1　空き店舗を使ったアートギャラリー

まちの理想像の提案として最初に取り組んだのは、空き店舗を使ったアートギャラリーです。東京造形大学や多摩美術大学の学生からプロのアーティストまで、さまざまな方々に空き店舗を使ったアートギャラリーを開催していただきました。このように空き店舗を使っていくにつれて空き店舗の契約が決まるようになりました。ビルオーナーさんにアートギャラリーをしているところを見せることで、この空き店舗を借りるとこんなにかっこよく見えるんだということがわかって、貸してくれるようになりました。最初は空き店舗をただで貸してくださいというのは頭を下げてお願いして回っていたのですが、私たちが空き店舗を使うと契約が決まるようになってくると、今度は不動産屋さんが AKITEN に空き店舗を貸すと契約が決まりやすいですよというチラシを刷ってどんどんまいてくれました。そうすると今度はビルオーナーさんからどんどん電話がかかってきて「うちも使ってくれ」という状況になりました。

図６空き店舗を使ったアートギャラリー

・事例 2　空き店舗を使ったアートイベント

これは駅前の大きなビルにあった空き店舗を 2 フロア使った事例です。空き店舗に 2 日間限定の公園をつくりました。私が子どものころには八王子にも空き地がいっぱいあって、そこでは子どもたちが遊んだり、お祭りがあったり、廃品回収やラジオ体操といった地域のコミュニティ形成の場になっていたのですが、いまは空き地はなくなってコインパーキングになっています。しかし立体的に見てみると空いているスペースの面積は昔より今の方が多い。昔の地主さんも好意で使っていいよといって使わせてくれていた。同じように空き店舗のビルオーナーさんも好意で使っていいよといって開放することができればコミュニティもできる。あるいは地域の特色を持った出展者が参加できるイベントを企画できるのではないか。そのように空き地と同じように空き店舗を捉えましょうというふうにオーナーに働きかける狙いで企画をつくりました。空き店舗を空き地にしましょうという意味で“AKITEN PARK”を名付けてオーナーに提案しました。オーナーに説明するときは市役所にも協力してもらいました。その理屈

図７空き店舗を使ったアートイベント

は、八王子の駅周辺には空き店舗がたくさんあるが広場とか公園がない。それで広場をつくったらこんな効果があるだろうという仮説をたてて検証してみたいということで説明したところ、市役所も理解してくれました。それで市役所がオーナーから一旦借り受けて、市役所から我々が借りるというかたちで１か月間貸してもらいました。その後、関連性は不明ですが再開発を行ってコンベンション施設を整備するのに併せて、駅前に広場をつくることが決まりました。

なお、私たちが空き店舗を借りるときは、急な入居希望者が表れても差し支えないように、借りる期間を１か月～1か月半に設定しています。それで企画から広報・搬入・開催・搬出までをこの期間に納めなければならないのでとても大変です。

・事例３　空き店舗×ファーマーズマーケット

これまでずっと空き店舗を何らか使おうということに重きを置いてやってきましたが、空き店舗を使って八王子の魅力を発信しようということで開いたのが“FARMART”というマーケットです。家賃が高い駅前の一等地に農家さんやクラフトの作家さんを集めて開くマルシェです。ただ単に野菜を並べてもらうのではなく、什器などデザインのコーディネートを私たちがきちっと設えることでよりおいしく見せるというサポートをしました。八王子は非常に農家さんも多くて、東京都では農業生産高が一位です。それで八王子の野菜について知ってもらう機会を作れたらいいなという企画です。開催するときにはムービーを撮って八王子にはこんなにすてきなお店があるんだよということを宣伝して、イベントの後にも来てもらえるような仕掛けだったり、パン屋さんと農家さんとでコラボレーションしてもらってイベントの後にこのパン屋さんに農家さんの野菜を売ってもらったりしました。そのように、“FARMART”のあとにつながるようにしています。

図８空き店舗×ファーマーズマーケット

・事例４　まちづくりのプロジェクトセミナー/運営マニュアル配布/リノベーションスクール

仲間集め、新たな担い手育成のということで、ゼミナールを開催しました。このゼミナールは 2014～15 年に東京都の事業で行ったもので、プロジェクトマネジメントや広報の仕方を学んでもらいました。この冊子は、ゼミナールで私が教えてきた内容を本にまとめたものでまちづくりのプロジェクトをする人たち向けの教科書になっています。私はもともとコンサルタント時代に学んだプロジェクトマネジメントのノウハウをまちづくり版に簡単に落とし込んで、例えば行政の補助金をとるときにどういう報告書を書いたらいいかとか、そういうことを簡単に落とし込んだ内容です。また空き店舗をどう改修したらいいかというリノベーションスクールを数回実施しました。

図９運営マニュアル

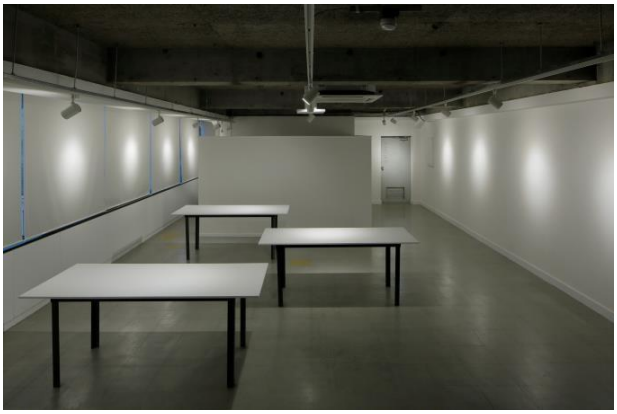

図 10 ギャラリー

・事例 5　ギャラリー、レジデンス運営

アートに対する地域ニーズを確認できたことから、常設のアートギャラリーを AKITEN で設計・施工し、地域アーティストの展示の場として運営しています。ギャラリーに併設して、全 6 室のアーティストインレジデンスを運営することで、クリエイターに制作場所を提供するとともに、制作と展示を一緒にできるような体制を作っています。なおこのギャラリーは普段はプロの方になるべく貸すようにしていますが、学生さんや障害を持っている方には審査なしで貸し出しており、遠方のアーティストが展示されるケースもあります。

・事例 6　空き店舗⇒障害者就労支援施設

ある障害者団体の方々が空き店舗を借りて、障害を持った方々が日常働く B 型の作業所としてカフェをやりたいが、精神障害者も利用するのでなかなかビルオーナーが貸してくれないので困っているという相談がありました。そこで私たちが使っている店舗のオーナーさんを紹介して入居することになりました。

図 11 空き店舗⇒障害者就労支援施設

先ほどの中心市街地の図にありました甲州街道沿いのところで、人通りが少ないのでカフェもないし、高齢者が休める場所もない。子どもたちを連れていく場所もないということで、では地域の人たちがそういう場所を求めているのであればそれに合わせたお店にしましょうと提案しました。それで内装からロゴ、メニューやレシピ、食器選びまで全部お手伝いさせてもらい、“FARMART”に出てくるような名店の方を連れてきて料理の指導をしてもらったりコーヒーのブレンドをつくってもらったりした結果、サラリーマンから高齢者、子育て世代まで様々な世代が集うお店になりました。

このお店をつくるときに東京都のバリアフリー条例がネックになりました。この条例では障害者、高齢者、養護児童が使う施設で 2 階建て以上の場合は必ずエレベーターをつけなさいというルールがありました。それで当初はつくれなかった。身体の障害者が使うのであれば当然エレベーターがいるだろう。でも精神・知的障害者は階段を上れるからバリアフリー条例はいらないのではないか。駅前にいっぱい空き店舗があるのにそこは使えなくて、山奥の方にいってプレハブを建ててそこを事務所にする。ハードのほうのバリアはフリーになるが障害者を山の方に追いやってしまうと障害者理解が進まないのではないか。それでハートのバリアをフリーにするために絶対中心市街地に必要だということを議会で提案したところ、東京都の条例ですが八王子市だけ独自で緩和しました。緩和してからの 1 年間で一気に中心市街地に 20 数店舗、そういった方々が使える施設が決まりました。

障害を持った人たちが地域の課題を解決することができれば社会参加につながるし障害者理解も進んでくるだろうと思います。地域が困っている場所で障害を持った人たちがお店を運営してくれれば、役にたっているというか助けられているというふうな理解が促されるのではないか。障害者団体が入居することで家賃の 1/2 補助金がでるし、スタッフの日当にも補助金がでるということで、ビジネスとして回らないようなことも回していける。そのような事例になりました。

■アートプロジェクトとまちづくり

アートプロジェクトとまちづくりのプロジェクトは何が違のうでしょうか。そもそもアートプロジェクトとは何かという定義を調べてみると、作品そのものではなくプロセスや社会的な文脈、地域活性化の取り組みなどを指すのですが、目的や活動内容は多様なので明確な定義があるわけではないということです。ではアートプロジェクトにできることとはなんだろうかと考えたときに、これは私の解釈ですが、アートプロジェクトは問題提起することに優れている一方、問題解決することには向いていないと思います。なぜ問題提起に向いているかというと、アートというのは言語的ではなく感覚的に働きかけることができるので、問題に対して気づきを与えるという点で言語より勝ることができるのではないかということです。例えば空き店舗の問題に関しても、「みなさん、空き店舗を使いましょう」といって話すよりも、実際にアーティストに入ってもらって展示風景を見せてオーナーさんが「あっ面白いじゃないか、じゃあちょっと使ってみよう」ということになるのではないか。その最初の気づきを与えるという点で言語的に進めるよりも効果があるということです。

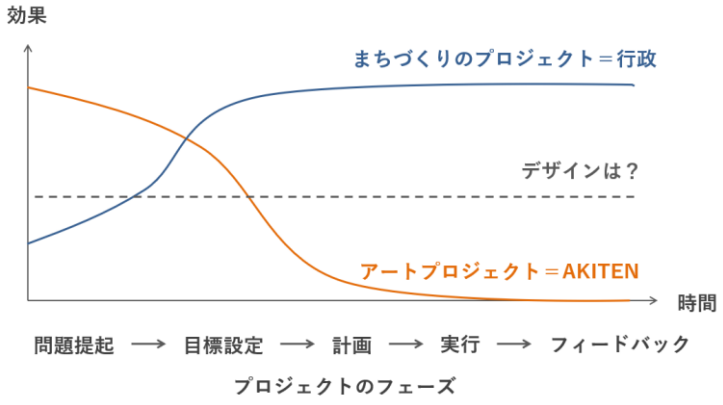

図 12 プロジェクトのプロセスにおける役割の変化

そこでプロジェクトのプロセスにおける役割の変化ということについては、プロジェクトのフェーズが問題提起から設定、計画、実行、フィードバックと進んでいく流れの中で、最初の問題提起というところはアートのほうがやりやすい。計画をたてて実行していくところはまちづくりのプロジェクトとして行政等が動くほうがやりやすい。自分自身でアートプロジェクトと市議会議員をやりながら、行政とうまくかかわりながら解決策を打っていくということが非常にやりやすいのではないかと思ってやっています。とはいえアートよりデザインのほうが使い勝手がいい場合もあるので臨機応変に対応しています。

■活動を長く続ける秘訣

私たちは、自分たちのまちをよくするために空いた時間で楽しみながら活動しています。長く続ける秘訣は、やりたいことしかやらないこと。そして無理をしないこと。組織人というよりもプロボノという感じでこれからも活動していきたいと思っています。

■このレターは、NPO 法人 AKITEN 代表理事 及川賢一さんにヒアリングを行って収集した情報等をもとに、都市活力研究所で編集・制作したものです。

■NPO 法人 AKITEN 代表理事 及川賢一さんプロフィール
1980 年生まれ。東京都八王子市出身。ソニー(株)、経営コンサルティング会社を経て、東京都八王子市に café W を共同設立。2011 年より八王子市議会議員(無所属)。現在 2 期目。空きテナントを活用したアートプロジェクトを運営する NPO 法人 AKITEN 代表。

発行元・問合せ先　公益財団法人都市活力研究所
〒530-0011　大阪市北区大深町 3 番 1 号
グランフロント大阪　ナレッジキャピタル　タワーC　7 F
TEL 06-6359-1322/FAX 06-6359-1329